

【7月19日（水）】

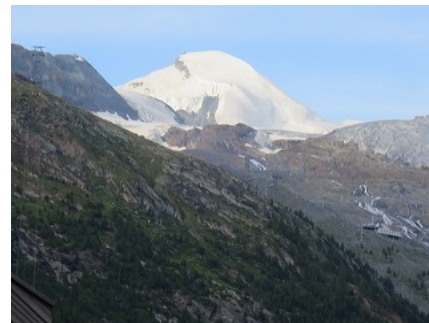
5時起きでスーツケースの整理、6時朝食、6時50分ホテルの支配人と共に集合写真を撮ってから出発、家内と二人はホテルの電気自動車で荷物と一緒にバスステーションへ向かう。



電気自動車



スイス国内最高峰ドム



アラリンホルン

今日は天気が良くて山がよく見える、アラリンホルン 4,027m、アルプフーベル 4,206m、テッシュホルン 4,491m、ドム 4,545m、と左から右へ 4,000m 峰がずらりは壮観だ。

7時30分バス発、サースタールをひたすら下る、SaasBalen のアントニウス礼拝堂（気になるが詳細不明）を左に見て8時 Stalden、8時20分 Visp、8時42分ブリーク Brig 到着、スーツケースをチッキでローザンヌへ送り8時58分の列車でレマン湖を目指す。

ローヌ川に沿って走る、途中シエール Sierre でドイツ語圏からフランス語圏に入りシオン Sion の古城を右に見てマルティニ Martigny から北進、モントルー Montreux でレマン湖 LacLeman に取り付き10時26分ヴィヴェイ Vevey 下車、ワイントレインの出発まで40分の待ち時間を利用してレマン湖岸を散歩した。

8. 世界遺産の葡萄畑ラヴォー地区

ヴィヴェイは古来葡萄畑の中にあるワインの集散地だったが、ジュネーヴから列車で1時間足らずのロケーションのため富豪の邸宅が多く、チャップリンが愛した別荘もここにある。

湖岸に立つチャップリンの像と写真を撮り、チョコレートのネスレ社が作った食品博物館アリマタリウムの前を歩いて駅へ帰る。



チャップリン像



ヴィヴェイレマン湖畔



ネスレ食品博物館

11時09分クリーム色の列車で湖岸から上ること約10分でシェーブルヴィレッジ Chexbres Village 到着、ピンクの駅舎の周り一杯の花で飾られていた。

ヴォー州ローザンヌからモントルー郊外シヨン城にかけて広がるレマン湖北岸の丘陵地帯を

ラヴォー地区 **Lavaux** というが、ブドウ栽培の歴史はローマ時代にさかのぼり現在の葡萄畑の原型は修道院支配の 11 世紀頃に形成されたと考えられている。

湖岸に向けてテラス状に広がる葡萄畑とそこに点在する小さな集落が織りなす景観、1,000 年を越えるワイン造りの長い伝統と歴史が評価され 2007 年 8 月にユネスコの世界文化遺産に登録されている。

スイス全体の 25% の葡萄栽培地を持つヴォー州の代表的葡萄品種は「シャスラ **Chasselas**」で州全体の収穫量の約 60% を占めている。

シャスラは栽培葡萄としては最古の品種と言われ、5,000 年前からナイル川流域で栽培、その後中世にはブルゴーニュでも栽培され、同地のシトー会修道士がレマン湖地域に齎したという。



シェーブルヴィレッジ



一杯の花飾り



サン・サフォランへ道標



ラヴォー地区葡萄畑

スイスでは 1654 年の古文書にシャスラの名が登場するので、少なくとも 350 年にわたって栽培され続けた訳でそれなりの強靱さと人々に愛される理由を持っている。

豊かな日差し、湖の反射光、石垣の輻射熱が葡萄の木の生育に理想的な環境を与え、優れた辛口のシャスラは「食通が最後にたどり着くワイン」と称されている。

スイスはワインの輸出国ではなく殆どを自国消費する歴史を続けてきたので、グリエールやラクレットなど個性豊かな地元のチーズやソーセージ、レマン湖の魚などの食品をエスコートするものと考えerべきかもしれない。

11 時半、湖岸への道は幾つかあるようだが我らはワイントレイルのブルーコースウオークを選んで下り始めた、途中葡萄の説明、収穫の様子、などを描いた説明版が幾つも立っている、湖面から照り返す日差しは強いが葡萄には良いわけだろう。

ゆっくり 1 時間半歩いてサン・サフォラン **St-Saphorin** 到着、2 つの塔がある教会は 15 世紀建築らしい、一寸困ったのは予定したレストランから時間が違うと断られたことだ。



ラヴォー地区マップ



葡萄絞り機

志波さんが懸命に他をあたってみたがダメ、結局最初のオーベルジュデロンド **Auberge de**

L'onde に頼み込んで入れてもらいヤレヤレ、やはり 4 軒あるレストランの内ではこの店が 1 番のようだった。

出された料理はスープに若鶏の丸焼き、そして待望の白ワイン、シャスラ・サン・サフォランのグランクリュ、シンプルだが素晴らしいマリアーージュ、最高のランチだったが値段のほうも 70CHF と最高だった。



オーベルジュデロンド



エンブレム



シャスラ・サン・サフォラン



若鶏の丸焼き

この後ガヴォーというワインバーに行けばワインの試飲をできるらしいが近くには見当たらず、レストランの筋向いに Les Foses という老舗のワイナリーがあり、室内温度を上げたくないの一寸だけという条件で中へ入れてもらい簡単に工程を見学、念願のシャスラを購入して辞去、湖岸沿いの駅サン・サフォランからヴィヴェイ経由、ローザンヌへ向かう。



近くのワイナリーを見学して待望のシャスラ・サン・サフォラン・グランクリュをゲット

9. オリンピックキャピタルローザンヌ

16 時ローザンヌ Lausanne 着、ローザンヌはレマン湖の湖岸段丘に広がっていて、今日の宿へは地下鉄でウシーオリンピック OuchyOlimpique へ下らねばならない、16 時 25 分、今日の宿ホテル・オーラック Hotel Aulac 到着。



ホテル・オーラック



見下ろす



カラスの雨宿り



対岸はエビアンか

此の地下鉄はアプト式地下鉄で、此の型の地下鉄としては世界最古のものらしい。

一旦到着したものの、スーツケース受け取りのため再びローザンヌ駅へ行き、帰ってシャワーを浴びたのは午後 7 時、今宵はガイド志波さんのご苦勞会なのでコース料理は避け、ムール貝、サーモン、パスタ、ビール、ワインと好きなものを食べ、飲んで旅の思い出を語り合いながら食事を楽しんだ。

【7 月 20 日 (木)】

朝 6 時 15 分に目覚めたら雨、風もあってベランダの椅子が吹き寄せられ、カラスが雨宿り、それでも 8 時半には晴れてレマン湖対岸のフランス領が見渡せた、あの辺りは飲料水で馴染みのエビアンだろうか。



東京オリンピックまであと・・・



各国民族衣装の人形が天井から

ホテルの前にあるオリンピック塔を見に行った、写真に撮ったら東京オリンピック開催まで 1,100 日、3 時間、56 分、03 秒、間違いなくこれは今も時を減らし続けているだろう、こんなものがちゃんと設置してあるのはさすがオリンピックキャピタルだ。

オリンピック博物館 Le Musée Olympique はローザンヌ出発前に行く予定だが、オリンピックがらみでもう一つ、メトロのウシー駅の天井にはオリンピック参加各国の民族衣装を着た人形が国旗と共にびっしりとぶら下っていて、やはり我が国は何処にと探したくなる、これは正に心憎い趣向と感心する。

ローザンヌはヴォー州の州都で連邦最高裁判所、ローザンヌ大学、ホテル経営科大学、インターナショナルスクール、各種カレッジ、各種国際連盟本部と知的色彩の濃い古都で、勿論国際オリンピック会 IOC 本部も此処にある。

ローザンヌの旧市街は坂の上であり、ローザンヌ駅 Gare の更に上だがメトロで下から 10 分程でリポンヌ広場 Place de la Riponne に到着する。

直ぐ前の、昔はローザンヌ大学の校舎だったという州立美術館は建物自体も立派な美術作品だ。

細い路地をたどって小高い丘に上がると旧市街の中心にノートルダム大聖堂 Cathedrale Notre Dame がある、此処からはサン・フランソワ教会の尖塔越しにローザンヌの街並みとレマン湖を一目で見渡せる。

スイスにおける最も美しい教会とうたわれるこの大聖堂は 12～13 世紀に建てられたゴシック様式の巨大建造物で中に入ると南壁に「バラ窓」と呼ばれる 13 世紀の鮮やかなステンドグラス、高い丸天井、中央に 5 段の鍵盤があるパイプオルガン、こんなのどうやって弾くのだろう。



美しい大聖堂



パイプオルガンの鍵盤



バラ窓

実際に聞いたわけではないが、鐘楼から時を告げる合図は鐘の音ではなく、肉声でする習慣が今も続いているという嘘のようなホントの話、但しこれは 22 時～2 時のみとのこと。

石畳の下り坂には有名店が立ち並ぶ、LäckerliHung でチョコレートのお土産を皆さん物色、小生のお土産は昨年出来なかったドーハ空港のデーツをリベンジと決めているので待ちぼうけ。

チェックアウトの時間が迫るので一旦ホテルへ帰って手続きを済ませ、スーツケースをデポして湖岸沿いをオリンピック博物館へ向かう。

中世の天守閣を其のまま残したホテルウシー城の前を通り、日差しの強い中ぶらぶら歩きで 20 分、モダンな作りのオリンピック博物館に着いた。



オリンピック博物館



名前を刻んだ階段



正面噴水



ハイジャンプの高さ

建物に向かう階段の縁石にオリンピック開催年とその国の IOC 委員の名が刻まれている、正面入り口の前にポール、これは走り高跳びのオリンピック記録を示すもので信じられない高さだ。

館内に入ったが、入館料を払って見学するほどの時間はないので、壁面のパネルを見て、オリンピックグッズを物色するに留めた。

何か記念に一つと探しているうちに 1980 年東西冷戦下、ソ連の首都モスクワ開催のオリンピック、ソ連のアフガニスタン侵攻で米国、日本などがボイコットし、マラソンで当時絶好調の瀬古俊彦が涙をのんだ大会のトートバッグを見つけ、これは珍品と購入した。



モスクワ大会のトートバッグ



ジュネーヴへ



ジュネーヴ空港

帰りは湖岸に出ず、博物館の庭伝いに歩き始めたら今度は 6m を越す棒高跳びのポール、その先にはロンドンオリンピックで採用された 100m のタータントラックが続いていた。

10. 帰国の途に

駆け足の見学だったのでランチはローザンヌ 14 時 12 分発の列車の中、Coop で仕入れたカツサンドをほぼぼっていたら 14 時 57 分にジュネーヴ空港駅に到着した。

空港が終点というのは中々良い、安心して乗っていられた。

此处で次のガイドに向かう志波さんとロンドンのお孫さんに会いに行く桑原さんとお別れ、カタル航空 QR-100 便で 17 時 23 分、スイスの地を離れた。

去年のドーハ空港でのトランジットは殆ど時間がなく、空港内を駆け足させられ、お土産を買うどころではなかったが、今回はたっぷり時間があつたので念願のデーツ Dates（北アフリカ原産、ナツメヤシの乾燥果実）を購入することが出来た。



ドーハで買ったお土産デーツ



アンデルマットのハンチング

唯、今回手持ちの外貨はスイスフランのみでユーロがないためクレジットカード決済にしたが、レシートを見て異常な高さに首を傾げた。

然し後で落ち着いて考えたら、レシート表示の通貨単位はユーロではなくカタールリアル Qatar Riyal で対円レートは¥31.33、納得して安心もした。

【7月21日（金）】

行きがけは機内の寒さに喉風邪を引く失敗をしたのでドーハからはブランケットを2枚借りてくるまり朝食で和食に飛びついたが、やはりご飯はダメ、もう少し我慢するのだった。

18時55分成田空港ランディング、この日のうちに我が家の風呂に入ることが出来た。

今回は色々と失敗が多く、仲間からの助けを借りて何とか今日を迎えられたように思う。

齢のせいだと断じたくはないが、旅のレベルや楽しみ方の工夫も必要だと深く反省。

それにしても旅を終えて、過ぎし日々を振り返りながら紀行文を綴っていく楽しさは何物にも代えがたい幸せと感じている。

2018.07.30 完成